

廉想渉『三代』論

— 家族共同体の新しい生成へ向けて —

蔡 永 姪

(2001年9月28日受理)

On Yom Sang-Sob's *Samdai*
— Towards a formation of family unity —

Chae Young-nim

This is an analysis of human relationship constituting Chib(Household, family, etc.) with *Samdai*, a piece of modern Korean Literature, as the text. Those who would conserve the traditional family unity and those who would reform it into a new type of unity are accordingly contrasted and the extend and state of the reform observed.

Key Words: Household, Chamber of the patriarch, Chamber for women-folks

キーワード: 「家」、家父長の部屋、女の部屋

はじめに

廉想渉は最初の本格的な韓国近代文学の発端とされる李光洙の小説『無情』(1917年)の後を継いだ作家である。15歳の時日本に渡り、京都三高、その後慶応大学史学科に入学するが中退、帰国し東亜日報の記者生活(1920年～)と並行して作家生活をはじめ。1920年代は韓国近代史の一つの転換期をむかえる。1919年3月1日、日本植民地からの独立を願う「万歳運動」が全国規模で起こる。1910年日韓併合後の国の存亡を賭けた民族エネルギーの総決算であったが、失敗に終わる。この歴史的な契機に韓国近代文学は本格的な形成期をむかえるが、この中で、廉想渉は初期・中期の作品活動を行う。『三代』(1931年)は廉想渉の中期に書かれた最も評価を得た代表作であり、また韓国近代文学の成し得た最も優れた作品として数えられている。

『三代』の作品構成は全42章の長編である。題材は1930年代のソウルの中産階層である趙家の三代に渡る家族関係を描いている。作品の中心人物は趙家の三代目の趙德基であり、德基はストーリーの展開において三つの時期に区切られ描かれている。その三つの時期とは①日本の京都三高の学生として冬休みに帰省し滞在する期間に趙家の家族関係及び周辺人物との関係を描く前半部(1章-10章)②卒業試験のため日本に戻って

いる間、祖父の中毒事件が展開する中間半部(11章-24章)③祖父の死亡により家督を継承するための終半部(25章-42章)とに分けることができる。

1. 対比される「家」認識

導入部の第1章は〈二人〉と題され、趙德基とその友人金柄華の性格とその性格形成の背後にある「家」の性格が提示される。德基は現在日本京都三高の学生で、卒業を目前に控えて帰省した。卒業試験のため明日日本に帰る德基の見送りのため、早稲田大学専門部政経学科を中退して浪人中の柄華が訪ねて来る。二人は〈似たような家庭状況〉であったが、現在の二人の立場には大きな開きがある。

「誰か訪ねて来たようだが、誰かいなあ？その頭の髪は格好と身なりは何んだ……ああいう身なりの友達を作るとは……友達といって訪ねてくるのが、どうして皆、あのような連中ばかりなのかいなあ」(1章11ページ)

德基の祖父、趙義官の目に映った柄華の様子である。(頭の髪は格好と身なり)の不良っぽい体裁は年長者に好まれそうも無く、德基の友人として相応しくない者として映り、既存の秩序体系に反抗的であると見られる。

この導入部の柄華の描写はその時の柄華の立場を象徴的に表現しており、後半部の德基と柄華の関係を予知させる。前半部の展開は德基の回想と叙述者の陳述を通して二人の過去へと導き、柄華の現在の立場を説いていく。(似たような家庭状況)という設定による共通点と現在状況の差異点が交差する性格造型方法が取られ、二人はある時点から対照的な生き方を示してきたということである。(似たような家庭環境)の内容が意味するものはどのようなものなのか。まず、「父」の社会的立場としての同一的な側面と二人の知力の側面である。二人の父は教会の〈長老〉としてキリスト教界で活躍することで交流があり、また德基と柄華は学校では1、2を争う秀才で理論的であることなどから、語りは現在状況の差異点に移っていく。德基の現在は裕福な祖父の庇護の下、早婚により家庭を持つ学生として、日本で〈絹の蒲団〉を使うほど贅沢な学生生活を送っている。一方の柄華は大学専門部を中退し、「父」に対して反抗し「家」を出て〈身なり〉も敬遠したくなる浮浪者のような生活である。性格も二人は対照的である。德基は金持ちの家の息子らしく〈明るく穏当〉であり、柄華は〈黒ずんだ顔に人に頭を下げない頑固〉に見える。それは自己成長を遂げていく過去3、4年間に起きた事実内容の含蓄であり、この含蓄された意味は二人の青年が直面している「家」に対する態度の相違である。その結果を示す様子を德基が柄華の下宿先を訪ねた時の様子で見してみる。

ソウルで生まれて二十年以上住んでいるが、このような町ははじめてであった。町に着いて一時間半以上も迷いに迷って形だけの門構えのこの家に着いた時にはもう日が暮れようとしていた。下宿というからにはほどほどの家だろうと漠然に思っていた德基の目に入った家は今まで見たことのないようなみずばらしい家であった。まるで家の周囲をキムチ甕を藁で編んだもので捲らしたような家であった(4章37ページ)

柄華のあまりにも貧しい生活を目のあたりにした德基は〈このような生活もある〉と驚き、〈私なら頭を下げて家に帰るだろう〉と思いつつも、自分の生き方を曲げようとしないうちにさらに〈同情〉をしてしまう。オンドルに火も入っていない部屋に風邪を引いて食べるものも無く寝転がっている柄華を引っ張り出して食事に誘って出かける。しかし、柄華は食べ物よりも酒だと德基を強引に酒場に誘う。そこで德基は柄華に〈頭を下げて家に帰る〉ことを勧める。しかし、柄華は〈父と妥協〉はできないと一蹴する。理由は信仰生活をめ

ぐる父との衝突であった。中学卒業後柄華は日本の早稲田大学専門部政経科に入る。しかし、〈神学〉の道に進んでほしい父は許さず、学費を中断されたことから、一年足らずで学校を止めることになる。このことが柄華の大きな〈社会主義思想〉への転換となり、帰国して家に帰ったものの〈宗教生活に反旗〉を掲げた彼は2ヶ月足らずで「家」を出てしまう。柄華にとっての「父」は個人的には「子」の自由な〈自己生活〉を束縛するだけでなく、社会的にはキリスト教信仰生活はもはや社会をリードする理念から程遠く〈資本家の守兵〉としてしか機能しない「父」世代とは〈妥協〉することはできないとする。これに対して德基は父子間は〈人倫〉の関係であり、〈自己生活〉や〈主義〉といったもので対立する余地のない家族共同体であるため〈妥協〉して「家」に帰ることを勧める。柄華は德基の〈人倫〉という「家」の認識は結局は〈相続〉という物質土台に依存したものであると指摘する。実際德基の「家」での行動は例文のように柄華の指摘した部分を露呈している。

德基も父よりは祖父の命令に従った。それに財産がまだ祖父の手中にあり、ちょっとしたお小遣いでも祖父の懐から出ている現状を考えると、祖父の意に従うようにしようと考えた(3章25ページ)

以上見てきたように柄華と德基の対話は「家」に対する認識の拠点においてその相違が明らかになった。德基の立場は〈人倫〉という観念から「家」を認識したが、例文に見られるように認識から乖離している。一方、柄華の立場は社会主義思想の視点に立って、〈人倫〉という「家」観念を否定しているが、問題点としては土台としての物的拠点を持っていないことである。次章では德基の〈人倫〉から乖離しつつある「家」の様相を見る。

2. 〈サランバン〉機能の空洞化

趙家はソウルの中心地にある富村に家を構えている。今の場所に引っ越したのは10年ほど前であり、正月ともなれば餅を搗く音で賑わう裕福な人々の住む地域である。引っ越しの際、金庫を入れるためにサランバンを改造した。〈サランバン〉と〈金庫〉は祖父趙義官の生き方を示すものである。

では〈サランバン〉と〈金庫〉は何を意味するのか。〈サランバン〉は「家」の家長に座する者の部屋として韓国の伝統的な「家」の中心である。「家」の価値体系を維持する象徴する場所として、家長を中心に「家」

を統率する機能が付与されている。具体的には祖先を祀る〈祭祀〉が最も重要である。〈金庫〉はそのための資産保持を意味する。祖父趙義官は〈サランバン〉の象徴する家長としての任務を忠実に遂行してきた封建的人物であると言える。しかし、趙家にはこの「家」の最も重要な実践の一つである〈祭祀〉をめぐって軋轢が生じることから、「家」認識の変化の葛藤を見ることが出来る。

趙家の二代目である德基の父趙想勲はアメリカ留学の経験のあるインテリ知識人である。教会の長老としてキリスト教界にも知られ、教育事業にも携わる教育者で、当時所謂〈愛国志者〉と呼ばれる社会的名誉のある人物である。しかし、想勲はクリスチャンとしての立場から〈祭祀〉を行う事はできないとし、祖父との〈祭祀〉をめぐり衝突は避けられず、祖父趙義官と息子想勲の反目は三代目の德基の子供の時代から繰り返されてきた。趙義官は息子であるとは言え、「家」の一大事に反対する想勲に対して「家」から出ることを命じ、息子想勲は別居を構えて出ることになる。趙義官は息子の代わりに中学生になる孫德基を早婚させ、家庭を持たせる方法を取る。その結果、想勲は「家」の長男という最も中心的な位置から外れることになる。では、想勲の〈祭祀〉拒否は何を意味するのか。それは〈サランバン〉機能の変化であり、「家」観念の否定に通じることであった。

想勲が〈祭祀〉の拒否を通して否定しようとした「家」観念の具体的な様相は何であるのか。それは「父」趙義官を通して確認することができる。朝鮮末期から1910年日韓併合、そして植民地下の現実を生きてきた70歳の趙義官は「家の繁栄」のためだけに生きてきたと言える。例えば併合前の身分解体が進む中、身分上昇のため金で格上の族譜を買い、併合後は町長を務め、資産を増やすことができた。つまり資産を〈家の繁栄〉の目的だけに蓄積し、使用することを忠実に守って来たのである。〈家の繁栄〉のための生き方は必然的に植民地体制に協力する側面を持っている。想勲はこうした「父」趙義官の生き方を批判し、否定したため二人の衝突は必至であった。

〈祭祀〉をめぐり〈サランバン〉をめぐり火種は趙家の更なる格上のために父が莫大な巨額を出し、家門の族譜編纂事業を始め、祖先の墓を整備する〈治山事業〉、その周辺には儒生を教育する〈書院〉を立てるなどの事業を起こす。このため名も知らない親戚が訪れ連日賑わい、その資金作りに苦労している有様に腹を立て、父をそそのかしている親戚と言争になる。これが発端で、「父」趙義官の怒りは最高に達する。以下は親戚の言い分である。

「あなたはクリスチャンであるから、このような事業には反対かも知れないが、祖先なしに、わが氏族が広まる事はないわけで、祖先を知らない人がどこにいるのか。我が趙氏も他の家門に引けを取らないよう子々孫々繁盛していくのが義務ではないか」(8章83ページ)

この親戚の言い分から「家」の観念の内容が確認できる。この言い分から見れば趙家の長男である想勲は毎年行われる母の〈祭祀〉にも長男としての役割を行わないばかりでなく、更に〈時代に逆行すること〉であると批判する。また〈金の使い方〉としても今は教育事業や図書館事業、朝鮮語編纂事業などをするべきだと力説する。しかし、賛同する親戚もなく、やり取りを聞いてしまった趙義官は〈余計な口出し〉であり、〈祖先〉も知らない人間とはもはや父子間の縁を切り、財産は孫の德基に継がせると最悪の展開を見せ、「家」における想勲の位置はさらに悪化する。

以上、〈祭祀〉をめぐり、祖父趙義官と二代目の想勲の葛藤を検討した。「家」観念の表出としての〈祭祀〉の拒否は「家」の存立根幹を揺るがす危機に直面したことであり、想勲を「家」から追い出す事で危機を回避することができた。一方想勲はクリスチャンとして〈サランバン〉の機能としての〈祭祀〉という「家」観念を否定したが、その結果「家」の中心から外れる結果となる。

3. 〈アンバン〉機能の空洞化

韓国の「家」における〈アンバン〉は女性が居る場所として、「家」の存続の根幹である子孫の生産機能を遂行する。ここでは〈アンバン〉機能を検討することで性に対する認識を見ていく。趙家は祖父趙義官の妻の死により〈アンバン〉の機能が停止した。祖父趙義官は「家」保持に忠実な封建的価値観の所有者として「家」の継承には息子想勲と孫德基がいるにも関わらず、〈もう一人男の子〉を得るため、70歳の年も省みず〈アンバン〉に若い妾を入れる。子孫を得るために妾を取ることは既存の価値観から社会的にも許容されていた。しかし、クリスチャンである息子想勲としては妾を入れることは一切許容できないという立場である。しかし、想勲は〈秘事〉として妻以外の女性洪敬愛と子供ができたことで、〈アンバン〉における問題を抱えることになる。つまり祖父世代は妾を取る事は問題にならないが、想勲にとっては理念の土台の崩壊という

問題を露呈する。洪敬愛は「家」に組み込まれない女性として〈アンパン〉に入れないことから問題が生じる。

德基が柄華の下宿を訪ねた折、飯よりも酒だと柄華に連れて行かれた酒場で偶然小学校の同期である洪敬愛に再開する。5年ぶりに会う敬愛は安い酒場で働く〈カフェの女給〉という世間から見れば酒を売る墮落した女性であるが、5歳になる娘がいて敬愛としては自力で生計を立てるための手段であった。墮落した女性と見られる敬愛の現在状況は二つの側面から起因している。一つは敬愛の「父」の家長としての「家」に対する態度からである。敬愛の父は〈家の事〉には関心がなく、財産を学校に寄付したり、小作人の立替をし、韓国独立万歳運動に関連したことから、繰り返された投獄生活により患い亡くなる。投獄される時は新聞紙上にも名前が上がるほど知られた〈キリスト教徒〉であり、〈愛国志者〉としての生き方を示した。つまり、「家」存続を省みなかったため「家」の物質的な基盤を社会、独立運動のために投げ出し、生活の根拠としての「家」を無くし、困窮を余儀なくされる。二つはここに〈同情〉を寄せ物心両面の援助を惜しまない想勲に出会い、そのやさしさに惹かれ、妻子のいる想勲の子供を持ってしまったことによる。その結果敬愛は〈アンパン〉機能を遂行する妾として想勲の「家」に入るかどうかの問題に直面する。〈娘〉と〈カフェの女給〉という敬愛の現在の立場は想勲の「家」に入らなかった結果であるが、この結果は敬愛には「家」の〈アンパン〉機能に組み込まれない女性の生き方の問題と想勲には個人的倫理の問題が追求される。

5年前、想勲と敬愛の二人の出会いの時点において、敬愛は学校を卒業し、貧しい家を支えるべき立場にあった。物心両面において協力をしてくれる想勲は「父」親代わりというべき尊敬できる存在であった。この時想勲は既にキリスト教として〈酒〉を飲む逸脱行為は始まっており、尊敬する先輩の遺族として守るべきである敬愛に〈一時的な衝動〉が抑えられず、本妻のいる身分でありながら子供ができてしまうという、キリストの理念の喪失である。更にその対応として敬愛の子供は自分の子ではないとし、敬愛と子供を切り捨てて自分の〈社会的な名誉〉を守ることで社会的な自分の地位を保持するため倫理的に墮落してしまう。つまりキリスト信仰の喪失である。一方敬愛にとっては「家」の〈アンパン〉に入る望みもない、〈カフェの女給〉という社会の底辺での生活を強いられることとなった。

想勲はキリスト信仰という理念に立ち、父趙義官の「家」保持という閉鎖的な性格を批判し、〈サランバン〉

で象徴される「家」観念を批判することはできた。しかし、敬愛との関係から見られるように、「家」観念に代わるキリスト信仰の喪失と子孫を得るという〈アンパン〉に代わるべき性認識基盤は確立できない。そのため〈アンパン〉は本妻も妾もない状態で停止し、ただ本能だけに振り回される空間と化する。

4. 趙家の崩壊

ここでは趙家の息子想勲の墮落と父趙義官の毒殺計画の関りが連動して進行し、「家」の崩壊へ向けた危機的な様相を見る。

趙家の現在の威容は財産家の祖父の趙義官、そして継承するだろう德基によるが、息子想勲は敬愛の登場以来、妻とは名前だけの夫婦ということで〈アンパン〉機能は停止している。理念としての〈サランバン〉も喪失している想勲としては次の例文から状態を確認できるように遊びに耽るしかない。

德基が日本に発ってから雪が降り始めた。ファゲ洞（想勲の家）サランバンの客は皆帰らないで、マージャンを始めた。今日は金曜日で、特別用件の無い人は教会に行くこともない。サランバンの客は雪を口実に遊びたいと誰もが思った。マージャンの最後にはおいしい出前の料理か、それともいつも行く〈あの家〉——隠れ料亭に想勲が連れていってくれるだろうと……マージャンのぶつかる音だけが洩れた。キリスト教という意識からか声を潜めサランバンの門をしっかりと閉め静かであった。(11章107ページ)

「家」の中心、家長の部屋である〈サランバン〉はマージャンと酒の場と化し、キリスト教徒の隠れ遊び場となっている。このことは想勲がキリスト信仰という理念を完全に喪失したことを端的に表している。家の下人の目からも〈この家の旦那様は神様の前では誰もが兄弟姉妹であるが、家に帰ると両班になる〉と見られることから想勲の倫理的土台がすでに崩壊している事が確認できる。このような、想勲の昼間は教会事業、教育事業という対社会的な〈体面〉を保持し、夜は隠れ料亭へ向かう秘密の二重生活を柄華に偶然に知られてしまうことから、想勲は柄華と関っていくようになる。この関りの中で柄華が敬愛の居所を知っていると聞いたことから敬愛に接近していくためさらに関りを深めた。世間の目を気にして別れた敬愛にはまだ未練が残っていたためでもある。長い空白を破り、想勲と敬愛は再開する。敬愛としては5年ぶりの空白があるにしても子供の父親ということで、複雑な心境を持った

ままの再会である。そこで想勲は昔の事について〈弁明〉を繰り返す、寄りを戻そうとホテルに誘うなど関係を逼る。敬愛はまだ〈未練〉の残る女性の一人という意味でしかなく、〈アンバン〉機能も停止している現在としては更なる欲望の対象でしかない。しかし、敬愛は〈昔、尊敬した想勲の落ち着きはらった〉想勲の二面性を見ると同時に想勲の〈あの家〉に通う新事実を突き止めることになる。想勲の通う〈あの家〉とは〈メダンチブ〉と呼ばれ、趙家の〈アンバン〉問題に深く入り込んでいた。

〈メダンチブ〉と呼ばれる〈あの家〉はどのようなところなのか。ソウルの金持ちしか知ることのできない、芸伎や女を斡旋する隠蔽された組織である。「家」の〈アンバン〉の範疇を超えたところで女性と関係を持つことができる場所であり、「家」の機能を組織的に模倣して成り立つ。——メダンという家長的な女頭による支配で資産家の性提供の場所であった。教会の長老で、教師の身分である想勲が自由に女に会えることの契機は〈あの家〉が媒介しており、〈あの家〉にとって想勲は〈道端で拾った旦那〉、つまり〈アンバン〉機能を提供する身代わりとしての「家」の基盤に入り込むことができたのである。メダンは資産家である趙家の財産を狙い、あの趙義官の妾もすでに〈メダンチブ〉から送り込んでいたのである。また、想勲には金義慶という〈女学生〉にしか見えない——昼は幼稚園の教師をして、夜には聖書を抱え込み、メダンチブに通う女性——女を斡旋しており、趙家父子の〈アンバン〉を組織的なやり方で牛耳ることができたのである。趙義官は男の子を得るため、また想勲は欲望を満たすため〈メダンチブ〉を求めたのである。メダンは〈アンバン〉機能を利用して財産乗っ取りのため趙義官の毒殺を計画し、その結果趙義官は死亡、想勲は倫理的墮落という形で、趙家の崩壊は進んでいく。しかし、死亡する前衰弱した趙義官は「家」の危機を感じ孫の德基を日本から呼び戻し家督を継がせることで、メダンの成功しているかに見えた財産乗っ取りの計画は外れる。次の例文は、家督相続のため帰国した德基の感じた「家」の雰囲気である。

暗鬱な空気の流れはアンバンからだけでなく、サランバンからも家中から、彼ら（財産を狙う者たち）が動くたびに感じられた。なぜだろう…金？金？かな…口から洩れる腐さい臭いは金を欲しがり腐ってしまった息のように思えた。しかし、一体金をどうしようとしているのか……そう言えばどこの家でも鍵を握っている人が死ぬ時は一度波風が起きると聞いたものだが、この家でも起きようとしているのか

(26章250ページ)

德基により感知された「家」の異様な空気の描写である。日本に戻っている間に進行した趙義官の毒殺という中心事件を動かした力の核心を嗅ぎ取るという表現で表している。「家」観念は変化し、その最終的結論というべき場面と言えよう。

5. 「家」の再生へ向けて

德基は「家」の存立を認める立場から、祖父と父想勲の「家」に対する争いを内部問題として収めさせていこうとする。そこで「家」を拒否した友人柄華、そして女性として「家」の〈アンバン〉に組み込まれない立場の敬愛を通して、「家」の存立意義を問い直し、これまでとは違う新しい方向へ向けた「家」の再生のための様相を見ていく。

祖父が一生を通して「家」のために管理してきた財産はメダンチブを背景にした女の企みによって危機に直面したが、德基の帰国により趙義官は〈金庫の鍵〉と祖先の慰霊が安置されている〈祀廟〉の管理を司る家長を立てることができた。新たな家長の誕生である。祖父趙義官の遺言状には〈德基はこれから趙家の家長になるため、財産を委託する。財産は德基個人のために与えるのではなく、趙家一門を代々継承していくための資源である〉と書かれてある。しかし、祖父の座っていた〈サランバン〉理念には疑問を感じる。まだ、卒業を控えた学生として、大学に進学することを理由にして「家」から離れることも考えてみる。祖父からは何よりも「家」の方が大事で専念するよう言われたが、逃げる方法があれば逃げたい気持ちに駆られる。

德基はサランバンより、机が置かれたアレバン(自分の部屋)のほうが恋しかった。祖父の席に座るのも申し訳なく、落ち着かない……家具の色々……色あせた家具も骨董品としての価値があり、家宝として代々受け継がれるかも知れないが、自分には相応しいと思えないし、見ていると祖父を思い出し、追加の卒業試験の勉強も手に付かない。(38章373ページ)

家長として〈サランバン〉に座った德基の心理が伺える。祖父に代わり「家」の責任者として〈サランバン〉に座ったが、「家」の責任遂行と維持と〈学業〉することは並立しないことを感じる。家長として、日本の大学に進みたいことを断念し、ソウルの京城帝国大学に変更せざるを得ないという〈自由〉を奪われた自

分に気付く。家を維持することについて否定しないで「家」を継承したが、その運用のための〈サランバン〉の機能に懐疑的である。この時期德基は筆順という名前の女性を強く意識し始める。筆順は柄華の下宿屋の娘で柄華の社会主義思想にも少なからず影響を受けている。家庭環境は洪敬愛の「家」に似たような状況で貧しく、一家を支えるため中学を止めて工場で働いている。德基はその健気な姿にいつしか〈同情〉を超えて惹かれていく。このことで、德基は「父」のような道を歩むのではないかと悩む。德基は筆順を意識することで〈サランバン〉〈アンパン〉との自分の関り方について自分自身に明確な答えを出すことができない。

一方柄華は社会主義思想に理解を示す下宿屋の家族と共に〈山海珍〉という食料品店を開く。筆順も敬愛も体面を気にせず、柄華の店で働く。このことを德基が知ったのは祖父の葬式の数日後突然に柄華が自分の始めた新しい店の宣伝広告のチラシを持って何食わぬ顔で訪ねて来たことによる。その柄華の姿は配達人の格好をしており、このことは身分階級に拘らないということである。德基は〈サランバン〉にいる家長として対面している構図にいたたまれない気持ちである。この時の様子は例文から見られる。

「(客人ですよと告げられ、サランバンから顔を出した德基は柄華の姿を一目見て驚き) どうして、そんなに来なかったのか。まあ上がって……旦那様、私はもう昔の金柄華ではありません。一食料品店の配達人です。どうかご最良して下さいませよう願っただけ申し上げて、ここで失礼します」(31章283ページ)

この場面は導入部の二人の姿を想起させる。德基の祖父から浮浪者に見えてしまった柄華から、食料品店の配達人として変貌し、社会に入り込んだ様子を劇的に見せている場面である。この場面の意味するものは「家」の在り方に対する認識の相違から出発した二人の姿の結果であると言える。家を出るという選択をしたことで貧しい生活に甘んじて引き受ける姿勢には評価(同情)しても、仕事も無く酒に明け暮れ、下宿屋の娘が工場で働く僅かのお金で一家の生計を立てている家に便乗して生活をする、何のすべもない〈浮浪者〉と変わらない柄華の姿に疑問を感じていた。しかし、今は配達人になって訪れている。柄華は観念的な社会主義者から〈山海珍〉という社会主義を実践するための資金を得る拠点を築くまでに到った。富豪と食料品店の配達人という二人の差は昔以上に歴然としている。しかし、德基が羨ましく感じることは〈山海珍〉にお

ける筆順の家族、敬愛などが力を合わせ、働いている姿を見たことによる。〈山海珍〉は德基の継承した「家」と対比できる新しい共同体で、そこには身分や血縁を越えた人間関係の生成への姿があった。

終わりに

德基の継承した「家」は德基の考えた理念としての〈人倫〉が生成される空間ではなかった。最後は〈金〉をめぐる欲望を赤裸々に表出する争う空間であることを思い知った。

一方、柄華の〈山海珍〉は「家」を持つことの否定から出発し、下宿屋とカフェを土台に協力者を得て立ち上げた〈私有物〉ではない〈同志のための生計策〉としての基盤を造った。ここには〈サランバン〉も無い〈アンパン〉も無かった。

以上『三代』における家族関係を検討した。三世代の人々がのそれぞれ抱える具体的な様相が〈サランバン〉〈アンパン〉を通して見る三世代の「家」観念に対する認識の相違は当時の世代認識の典型として位置付けることができる。また、柄華、敬愛、筆順という同世代の対比的人物を重ねて提示することから、「家」の新しい展開の可能性が探求されていた。作品の結末は柄華による社会主義運動の一環である人間集団〈山海珍〉は植民地支配者によって抹殺されかかる。この柄華を救うために德基が祖父から継承した一族存亡のための資産が重要な役割を果たすことを示して終わる。作者は植民地体制においては〈サランバン〉も〈アンパン〉も有る家族共同体は認められても、〈サランバン〉も〈アンパン〉も無い理想的な新しい社会集団は成立できないことに反抗の意を込めて書いた作品である。

*テキスト

廉想渉全集 4 民音社 1987年を用いた。本文中の翻訳は筆者による。

【参校文献】

- 金潤植『廉想渉研究』ソウル大学出版部1987.
- 金鐘均編『廉想渉小説の研究』国学資料院出版1999.
- 金サンジュン『1920年代文学と廉想渉』図書出版亦楽 2000.
- 李甫永『乱世の文学』イエリム企画 2001.

(指導教官：相原和邦)